



不易流行

——美濃国便り——

36

中村哲先生に捧ぐ

朝日大学学長 大友 克之

ここ岐阜の銀杏並木が黄金色に輝いた師走のある日、アフガニスタンで人道支援活動に奔走するNGO「ベシヤワール会」の現地代表を務める中村哲医師が、現地を車で移動中に何者かに銃撃され怪我を負ったとの報が届いた。病院に搬送された、命に別状なしとのことではっと胸をなで下ろしたのも束の間、その二時間後、訃報が駆け抜けた。享年七十三歳であった。

筆者は整形外科医として、国立がんセンターにおいて九州大学系の先生方の下で勉強させていただいた。ある先生から、九大の同門で、パキスタンで医療活動を展開する中村先生の存在を教わったのが最初のきっかけだった。その頃は、いづれ自分も発展途上国に向かい医療支援に身を投じようと夢見ていた。

学長職に就き、二〇一三年より学長企画の初年次教育「建学の精神と社会生活」を新設

2015年に来学された中村哲先生



した。大学生になったばかりの一年生に「朝日大学で学ぶ意義を考えてもらおう」。そのためには「ホンモノを見せて、知的好奇心を刺激する」。あえて社会性の高いテーマを設定し、各分野のトップランナーの招聘に汗を流した。その中で二〇一五年から二年連続で中村先生をお招きして講演していただく機会を得た。

毎週水曜日の三限目に設定した必修科目であったが、ベシヤワール会からの要請は分かりやすいものだった。「まずは若い学生さんたちに中村の活動を知ってもらおう」とのこと。事前に、先生の活動を紹介したテレビ番組のビデオを複数本送ってきて、どの作品でもよいので、最初の九〇分程度でキュメンタリー映像を見せる。その後、四限目にホンモノの中村先生が登場され、六〇分の講演。その後は質疑応答、という形式であった。

医療支援を続ける中で、二〇〇〇年にアフガニスタンの大干ばつを経験し、良質な水源の確保の必要性を痛感。「私はヤブ医者だから」と、医療活動は別の部隊に任せて、先生が先頭に立って、五年間で一六〇〇の井戸を掘った。さらに「病気や貧困の背

景にあるのは食糧問題。農地の回復が急務」と、灌漑水路を建設し、水源の確保と緑地化を推し進めた。

先生の故郷の山田堰（福岡県朝倉市）をモデルにした取水堰の話、蛇籠と呼ばれる技法を用いて水路の護岸を補強する話。コンクリートで固めるのではなく、あえて日本の二二〇年前の技術を再現すること、現地の人々が維持管理のできるものを創ることが大事だと強調する。

先生は語りかける。「われわれは、近代的な技術を投入すればすべてのことが可能であるかのような錯覚をしている。これは土木分野でも医療でも同じ。人間と人間はもちろんのことだが、人間と自然がいかに折り合って仲良くしていくか、これが大きな時代の流れとなっている。人間はどこへ行くのか？」「多民族が暮らし、谷ごとに異なる部族が暮らすアフガニスタンは日本人にとって最も分かりにくい国の一つ。言葉、習慣、宗教の違いを認識した上で、いかに相手のことを理解するか、何を苦しんでいるのか、彼らの声に耳を傾けることから始めよう。自分が見慣れないものを見ると、われわれの価値観、物差しで見えてしまう。単に違いであるものを、優劣や、進歩している、遅れているとか、善悪で決めようとする。私たちは、現地の風習、文化、宗教をそのまま受け入れることを一つのルールとしてきた」――。

学長室には今も先生が残された「照一隅」の言葉が飾られている。